

■ 書 評



育児に悩んでいます：うちの子、どこかへんかしら？

一 双極性障害やそのほかの精神の病気をもつ子どもの親のためのガイドブック
シンディ・シンガー、シェリル・グレンツ 著

森野百合子 監訳・訳

高木道人 訳

星和書店

2014年3月 376頁

本体価格 2,300円＋税

本書は、2003年に米国で出版された“*If Your Child Is Bipolar: The Parent-to-Parent Guide to Living with and Loving a Bipolar Child*”という、双極性障害の子どもをもつ親のためのガイドブックの訳書である。原書では、タイトル・サブタイトルともに“Bipolar”と明記されているが、訳書では「双極性障害」という疾患名は、サブタイトルに示すにとどまっており、タイトルでは「育児の悩み」という、より一般的な用語が用いられている。児童・思春期の精神障害・発達障害は、単独でなく合併することが多いことが知られている。本書も内容としては、双極性障害だけでなく、発達障害や他の精神障害をもつ子どもの支援者にも役立つ知識や対応法が多く含まれる。この10年間にわが国では発達障害者支援法施行などもあり、子どものこころの問題となると、発達障害、特に自閉症スペクトラム障害や注意欠如・多動性障害が取り上げられることが増えている。このような状況は、国内だけでなく海外においても同様で、昨年、米国精神医学会の診断基準（DSM）が改訂され、診断基準や診断名が変更されたことは記憶に新しい。一方、高機能自閉症スペクトラム成人のQuality of Lifeに影響する要因に他の精神医学的診断や攻撃性などがあるとの報告もあり、発達障害支援においても精神医学が期待される役割は大きい。訳書のタイトルは、子どものこころの問題を取り巻く環境の変化に対応したもので、本書が、双極性障害の子どもをもつ親だけでなく、幅広く育児に悩みを抱える親・家族や支援者に役立つことを期待してのことと考えられる。

原著者の一人であるシンディ・シンガー氏は、アスペルガー症候群の子どもの母の会の設立者で双極性障害の母の会のメンバーでもあり、訳者の高木道人氏は、NPO法人日本トゥレット協会会長である。原著者・訳者ともに、発達障害・精神障害を有する子どもの家族の支援に長く関わってきたこともあり、内容は具体的で、わかりやすく実的である。構成は、以下の6部である：第1部 はじめに、第2部 「診断」を受けてから、第3部 子どもが治療を受ける手助けをする、第4部 双極性障害の子どもがいる家族、第5部 あなた自身の健康を考える、第6部 双極性障害をかかえて生きていく子どもを援助する。自分の子どもが育てにくいと親が感じるところからはじまり、医療機関を受診して診断がついたとしても、子どもの成長に応じて、その都度学校や周りの人との調整が必要となるため、不安や徒労感・孤独感を感じることも多いであろう。本書では、学校生活や経済的問題など、日常生活の様々な局面における具体的に現実的な対応方法の例を提供してくれる。子どもを支えるということは、子どものいる家族や子どもが過ごす環境そのものを支えることであり、親や家族が自分たち自身のケアにも目を向けることの必要性についても説明されている。引用されている多くの体験談は、同じような気持ちを持つものが自分だけではないという気持ちにさせ、孤立感から救われるであろう。また、児童精神科医療に足を踏み入れたばかりの支援者にとっては、患児の家族の気持ちを知ることに関心をもたない。

このような実践的なガイドブックは、時機を逸さず出版することが肝要で、内容によっては10年前の米国社会に基づいた記載もあり、わが国の現状にそぐわない点もある。また、この10年間でインターネット環境が大幅に普及し、体験談は国内外のブログなどで多く読むことができるし、患児への接し方のエッセンスに関しては、学会や患者会などのホームページで簡単にダウンロードできるようになった。しかし、家族の悩みは、時代や地域を超えて普遍的なものもある。本書を手元において何か困ったことがあった時に関連する箇所を読めば、今後の支援の方向性を指し示してくれるのではないかと考えられる。

(高橋秀俊)